

## 北琉球奄美請島池地方言の母音の高さの進行同化と逆行同化

白田 理人 (志學館大学) 重野 裕美 (広島経済大学)

### 1. はじめに

本稿は、北琉球奄美請島池地方言における母音の高さの同化を記述し、共時的・通時的分析を行う。データは、筆者が池地集落出身の男性1名(1923年生)・女性1名(1924年生)を調査協力者とした聞き取り調査で得たものを用いる。本稿の主な観察・主張のうち、特筆すべき点として、進行同化と逆行同化の両方が見られる点、母音素性[±high]に加え、その他の母音素性や、挟まれる子音が同化の条件に関与的である点が挙げられる。

### 2. 背景

#### 2.1. 北琉球奄美請島池地方言

北琉球奄美請島池地方言(以下池地方言)は、奄美大島の南に位置する請島の池地集落(鹿児島県大島郡瀬戸内町)で話されており、琉球諸語を南北二つに分けたうちの北琉球(沖縄本島以北)に属する言語変種である。請島には、池地集落・請阿室集落の二つの集落があり令和元(2019)年8月時点での人口(世帯数)はそれぞれ52人(35世帯)・40人(29世帯)である(瀬戸内町2019)。

池地方言を含めて、奄美大島南部の方言の特徴として、語末に阻害音や流音を含む様々な子音が見られ(e.g. kʔup「首」, kʔit「傷」, kʔuk「釘」, kʔute「口」, hanus「さつまいも」, ʔuc「牛」, nīdum「鼠」, tur「鳥」), また、語中においても、調音位置・調音方法の異なる様々な子音の連続が観察される(e.g. ʔutna「打つな」, jakba「焼けば」)。

#### 2.2. 池地方言の音素体系

表1及び表2に、本稿で用いる表記により、池地方言の音素一覧を示す。[]内は音声実現である。母音については素性[±high]・[±low]・[±front]・[±back]を併記する。留意点として、まず、音声上の長母音は短母音の連続として解釈する(e.g. ʔëjōm [ʔë:jōm]「開ける」)。また、前舌母音 i, e 及び半母音 j に先行する子音は口蓋化し(e.g. miri [m̠iri]「見る」, joreba [jor̠eba], jakjum [jak̠jum]), 半母音 w に先行する子音は唇音化する(e.g. kwëë [kʷë:]「買え」)。

表 1: 池地方言の母音音素一覧

高さ		前後		前舌	中舌	奥舌	
				[+front]	[-front]		
				[-back]		[+back]	
狭	[+high]	[-low]	i	ï		u	
半狭	[-high]		e	ë		o	
広		[+low]			a[ɑ]		
円唇性				[-round]		[+round]	

表 2: 池地方言の子音音素一覧

調音位置 調音方法		調音位置		両唇	歯茎	歯茎硬口蓋 ~硬口蓋	軟口蓋	声門
		無声	喉頭化 非喉頭化	p[p~pʰ]	tʰ	teʰ	kʰ	ʔ
破裂~ 破擦音	有声				b	d	dz	
	摩擦音	無声			s	ɕ		h
鼻音				m	n[n~ɲ~ŋ~N]			
流音					r[r~l]			
半母音				w		j		

### 2.3. 琉球諸語における母音同化に関する先行研究・資料

ローレンス (2001) は、先行研究・資料から、子音 h または r を超えて起こる母音の「融合」(完全相互同化) を論じている。例として、南琉球黒島方言について、伊豆山 (1996:3) をもとに、子音 h を挟んだ母音の同化が見られることを指摘している (e.g. /pataki/+/-ha/ → patehe 「畑へ」、/jamatu/+/-ha/ → jamatoho 「内地へ」)。また、北琉球徳之島井之川方言について、中本 (1979:24) に基づき、子音 r を挟んだ母音の同化が見られることを指摘している (e.g. ʔagari ~ ʔagërë 「東」)。子音 h 及び r の透明性 (transparency) の音韻論的説明として、口腔調音素性の欠如を挙げている。

奄美大島大和村大和浜方言の辞典である長田・須山 (1977:337,624,763,843,856) 及び長田ほか (1980:117,292,367,429,576,578) は、狭母音が子音を挟んで後続する広母音の影響で半狭母音化した可能性を示唆している (e.g. [nok'a] 「糠」、[mora] 「糠」、[ʔota] 「歌」、[ʔosaqi] 「兎」、[ʔonagi] 「鰻」、[mok'aʃi] 「昔」、[mok'aʷuri] 「向かう」、[heraʷuri] 「拾う」、[ʔjeraʷuri] 「借りる (古語: いらう)」, [k'] は [kʰ] を表す)。

### 2.4. 池地方言における母音同化に関する先行研究・資料

春日 (1961:330-332) は、終止形語尾 (本稿の非過去接辞) における母音交替を断片的に記録している (e.g. [kakjumʊ] 「書く」、[nagijumʊ] 「投げる」、[josejomʊ] 「教える」、[kjo(:)mʊ] 「来る」、[sjo(:)mʊ] 「する」)。また、春日 (1974:560,557,554,552) は、狭母音 \*u が子音を挟んで後続する半狭母音の影響で半狭母音 o に変化したと見られる語例を報告している (e.g. [ʔkomo] 「雲」、[ʔtono] 「角」、[hoʔton] 「蒲団」、[horo] 「風呂」、[mone] 「胸」)。ただし、春日 (1974:555,552) を見ると、大和浜方言とは異なり、広母音に先行する狭母音の半狭母音化は起こっていないと考えられる (e.g. [nuʔka] 「糠」、[muʔka:sj] 「昔」)。

筆者の調査報告である白田・重野 (2020) において、本稿で扱う動詞に見られる母音の交替について一部語例を示しているが、交替の条件の詳細は述べていない。

### 3. 池地方言の母音の進行同化

#### 3.1. r 語幹・母音語幹動詞の非過去形・意志勧誘形・命令形に見られる母音の進行同化

規則動詞の活用において、一般に、非過去接辞/-jum/・意志勧誘接辞/-ru<sup>1</sup>/の母音は奥舌狭母音 u として、命令接辞/-ri/の母音は中舌狭母音 i として現れる<sup>2</sup>。しかし、語幹末音節の母音が半狭母音・広母音の r 語幹動詞・母音語幹動詞の場合、語幹末音節の母音の素性[-high]が接辞母音に拡張し、非過去接辞・意志勧誘接辞の母音は奥舌半狭母音 o に、命令接辞の母音は中舌半狭母音 e になる。加えて、推量接辞/-ru/の母音は、先行するテンス接辞が狭母音の場合は狭母音 u となるが、テンス接辞が半狭母音・広母音<sup>3</sup>の場合には素性[-high]が拡張し半狭母音 o となる。表 3 に、r 語幹動詞・母音語幹動詞の非過去形・意志勧誘形・命令形・非過去推量形の語例を示す（網掛け部分は同化が起きている語例である）。以降、同化のトリガー／ターゲットとなる母音をそれぞれ四角／二重四角、対照する母音を下線で示す。

表 3: r 語幹・母音語幹動詞非過去形・意志勧誘形・命令形(対照例:m 語幹動詞)

語幹末		活用形	非過去形	意志勧誘形	命令形	非過去推量形
		接辞	-jum/-jom	-(r)u/-(r)o/-ju	-(r)i/-(r)e/-i	-ju-ru/-jo-ro
		意味	～する	～しよう	～しろ	～するだろう
m		食べる	kamjum	kamu	kamī	kamjuru
狭母音+r	ir	見る	mirjum	mirju	mirī	mirjuru
	ir	蹴る	kirjum	kiru	kirī	kirjuru
	ur	売る	?urjum	?uru	?urī	?urjuru
半狭母音+r	er	もらう	j <sup>er</sup> j <sup>o</sup> um	j <sup>er</sup> o	j <sup>er</sup> e	j <sup>er</sup> j <sup>o</sup> ro
	or	乗る	n <sup>or</sup> j <sup>o</sup> um	n <sup>or</sup> o	n <sup>or</sup> e	n <sup>or</sup> j <sup>o</sup> ro
広母音+r	ar	割る	w <sup>ar</sup> j <sup>o</sup> um	w <sup>ar</sup> o	w <sup>ar</sup> e	w <sup>ar</sup> j <sup>o</sup> ro
前舌／中舌	i	出る	?idzijum	?idziru	?idzirī	?idzijuru
狭母音	i	降りる	?urijum	?uriru	?urirī	?urijuru
前舌／中舌	e	痩せる	j <sup>ee</sup> j <sup>o</sup> um	j <sup>ee</sup> o	j <sup>ee</sup> e	j <sup>ee</sup> j <sup>o</sup> ro
半狭母音	e	開ける	?e <sup>ej</sup> j <sup>o</sup> um	?e <sup>ee</sup> o	?e <sup>ee</sup> e	?e <sup>ee</sup> j <sup>o</sup> ro

#### 3.2. 母音の進行同化の制限

3.1 で述べた進行同化は、母音に挟まれる子音が r/j/rj の場合にのみ起こり、これ以外の子音が挟まれる場合は起こらない<sup>4</sup>。まず、非過去形・意志勧誘形・命令形の接辞母音が半狭

<sup>1</sup> 接辞初頭の r は、子音語幹に後接すると削除される。

<sup>2</sup> 不規則動詞では非過去形で語幹が子音のみになり、その場合は接辞が半狭母音 o になる (e.g. eom 「する」, kjom 「来る」)。

<sup>3</sup> 過去接辞は広母音 a を持ち、後続する推量接辞の母音は半狭母音で現れる (e.g. k<sup>ar</sup>o 「食べただろう」)。

<sup>4</sup> 動詞と接辞の境界に子音 h が現れることはないため、h を挟んだ母音の同化 (cf. 2.3) が起きるかどうかは確認できない。

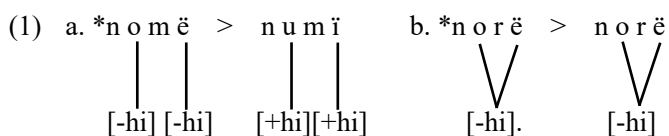
母音で現れる動詞でも、接辞/-t̃i/の添加によって作られる中止形の場合は、接辞の母音が半狭母音にはならず、狭母音で現れる (e.g. *jet̃i*「もらって／もらった」、*not̃i*「乗って／乗った」、*wat̃i*「割って／割った」、*jeet̃i*「痩せて／痩せた」、*ʔeēt̃i*「開けて／開けた」、cf. *ʔut̃i*「売って／売った」、*ʔidz̃it̃i*「出て／出た」)。次に、k 語幹・m 語幹・s(/ɕ)語幹・t(/tɕ)語幹動詞では、語幹末音節の母音が半狭母音または広母音であっても、非過去形・意志勧誘形・命令形の接辞母音が狭母音で現れる (e.g. *jakjum*「焼く」、*jaku*「焼こう」、*jak̃i*「焼こう」、*kamjum*「食べる」、*kam̃i*「食べろ」、*nooɕum*「直す」、*toosu*「倒す」、*toos̃i*「倒せ」、*katɕum*「勝つ」、*katu*「勝とう」) ことを確認している。さらに、w 語幹由来動詞では、共時的には (表層には) 語幹末に w は現れないが、語幹末音節の母音が広母音であっても、非過去接辞の母音が狭母音で現れる<sup>5</sup> (e.g. *ʔarajum*「洗う」)。

また、名詞では、広母音+r に狭母音が後続する例が見られる (e.g. 「樽」*taru*、「針」*hari*)。このため、[-high]の進行同化は、動詞の接辞境界のみで起きると言える。

### 3.3. 通時期的変化と共時的交替の関係

3.1 で述べた進行同化において、ターゲットとなる母音は、歴史的には半狭母音に遡る。まず、動詞の非過去形は、北琉球諸語全般において、「連用形+ヲリ (存在動詞)」に由来しており (cf. 服部 1959:334-338)、非過去接辞の母音は\*o に遡ると考えられる。次に、意志形・命令形の接辞については、それぞれ、日本語共通語の子音語幹動詞意志接辞-oo/命令接辞-e と対応しており、接辞の母音はそれぞれ\*oo/\*e に遡ると考えられる<sup>6</sup>。

奄美方言は、一般に、(\*e >) \*ë > ĩ, \*o > u のような、\*半狭母音 > 狭母音の通時期的変化を経たとされている (cf. 中本 1976:110)。以上を踏まえると、3.1 で述べた母音同化は、通時的には、\*半狭母音 > 狭母音の変化が、部分的に阻止された結果であるといえる。すなわち、母音一つと結びついた[-high]は[+high]へと変化したのが、r (または j/rj) を挟んで二つの母音と結びついた[-high]は変化しなかったと考えられる<sup>7</sup>。(1)に、\*nomë > num̃i「飲め」の変化の過程と、\*norë > nor̃e「乗れ」において[-high]が母音二つと結びついた構造を示す。



## 4. 池地方言の母音の逆行同化

### 4.1. w 語幹由来動詞の否定形・意志勧誘形・命令形・条件形における母音の逆行同化

w 語幹由来動詞の否定形・意志勧誘形・命令形・条件形においては、語幹末母音と接辞の融合が見られる。語幹末母音 a と接辞母音が融合すると半狭母音が生じ、さらに、先行する

<sup>5</sup> ただし、w 語幹由来動詞で、語幹末音節が半狭母音 o の場合は、非過去接辞が半狭母音 o になる (e.g. *kooj̃om*「買う」)。

<sup>6</sup> 母音語幹動詞には、いわゆる「ラ行五段化」の類推的变化が起き、r 語幹動詞に準ずる活用を示すようになったと考えられる。

<sup>7</sup> ローレンス (2000:56) でも類似の議論がなされている。

音節の狭母音が半狭母音になることがある。ただし、[-high]を持つ母音に先行する音節の母音が必ず[-high]になるわけではない<sup>8</sup>。前舌／中舌狭母音は、前舌／中舌半狭母音が後続する場合には同化して半狭母音になるが、奥舌半狭母音が後続する場合は半狭母音にならない。すなわち、ターゲット母音が[-back]の場合、[-back]でないとトリガー母音にならない。一方、奥舌半狭母音は奥舌半狭母音／前舌半狭母音のいずれが後続する場合も狭母音になる。よって、ターゲット母音が[+back]の場合は、[+back]でも[-back]でもトリガー母音となりうる。また、融合が生じない場合も、語幹末母音は広母音であり、素性[-high]であるが、同化が起こらない。すなわち、[+low]の場合は同化のトリガー母音となりえない。表4に、w 語幹由来の否定形・意志勧誘形・命令形・条件形の語例を示す（網掛け部分は同化が起きている語例である）。

表 4: w 由来動詞非過去形・否定形・意志勧誘形・命令形・条件形(対照例:m 語幹動詞)

語幹末	活用形	非過去形	否定形	意志勧誘形	命令形	条件形
	接辞	-jum	融合	融合	融合	融合
意味	～する	～しない	～しよう	～しろ	～すれば	
m	飲む	numjum	numam	numu	numi	numba
CiCa	洗う	?arajum	?arom	?aro	?arë	?arëba
CiCa	借りる	?irjajum	?irjom	?irjo	?erë	?erëba
	拾う	hirjajum	hirjom	hirjo	herë	herëba
CiCa	使う	tikajum	tikom	tiko	tëkë	tëkëba
CuCa	歌う	?utajum	?otjom	?oto	?otë	?otëba
	もらう	murajum	morjom	morjo	morë	morëba
	寄り合う	jurajum	jurjom	jurjo	jurë	jurëba

#### 4.2. 名詞における母音の逆行同化

2.4でも述べたように、池地方言では狭母音\*uが子音を挟んで後続する半狭母音の影響で半狭母音oに変化したと見られる語例が見られる(e.g. nono「布」, soso「裾」, somo「相撲」)。ただし、動詞の場合と同様、広母音に先行する狭母音の半狭母音化は起こっていない(e.g. ?usak「兎」, ?unak「鰻」, ?uta「歌」)。

#### 4.3. 通時的変化と共時的交替の関係

4.1で扱った母音の逆行同化に関して、進行同化の場合とは異なり、通時的にも[+high] > [-high]の変化が起こったと考えられる。

なお、共時的交替・通時的変化の両方を合わせてみると、進行同化の場合と異なり、挟まれる子音に関わらず変化・交替が起きていると言える。

<sup>8</sup> バンツー諸語の母音の高さの同化においても、同様に、前後に関わる素性が関与しており、もともと共通する素性が多い方が同化が起こりやすいという言語一般の傾向が指摘されている(Clements 1991:26,59)。

## 5. まとめ

本稿は、北琉球奄美請島池方言における母音の高さの同化を記述し、共時的・通時的分析を行った。進行同化と逆行同化の両方が見られる点、母音素性[±high]に加え、その他の母音素性や、挟まれる子音が同化の条件に関与的である点を指摘した。

今後の課題として、周辺地域のさらなる調査が挙げられる。

## 参考文献

- 長田須磨・須山名保子編 (1977) 『奄美方言分類辞典 上巻』 東京：笠間書院。
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子編 (1980) 『奄美方言分類辞典 下巻』 東京：笠間書院。
- 春日正三 (1961) 「請島 (本島南部方言)」 東条操 (監修) 『方言学講座 第四巻 九州・琉球方言』 (pp.321-333) 東京：東京堂。
- 春日正三 (1974) 「奄美大島方言の研究—請島・池方言の音節について—」 永山一勇博士退官記念会 (編) 『国語国文学論集』 (pp.564-547) 東京：風間書房。
- 白田理人・重野裕美 (2020) 「瀬戸内町請島方言の動詞活用資料」『シマジマのしまく とうば 1 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究 令和 元年度』 pp.8-20.
- 瀬戸内町 (2019) 「人口世帯集計表 (令和元年 8 月末現在)」『鹿児島県大島郡瀬戸内町』 <<http://www.town.setouchi.lg.jp/koseki/cho/chosei/jinkou/documents/jinkou201908.pdf>> 参照日 2020 年 2 月 11 日。
- 中本正智 (1976) 『琉球方言音韻論の研究』 東京：法政大学出版局。
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』 東京：岩波書店。
- 琉球列島班編 (1993) 『長田須磨の奄美の民話と昔がたり—奄美大島大和浜方言の記録 その 2—』 (文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」成果報告書)。
- ローレンス ウェイン (2000) 「子音を越えて起こる母音の融合—琉球諸方言における現象を中心に—」『音声研究』 4(1):55-60.
- Clements, G. N. (1991) "Vowel Height Assimilation in Bantu Languages." *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 17:25-64.